

高校生直木賞 という読書教育

高校生直木賞の意義と課題

高校生直木賞のこれまでの経緯

1 モデルとしての高校生ゴンクール賞

- ・フランスの中学の先生が発起人となり、1988年に創設。
- ・ゴンクール賞の候補となった作品から高校生たちが選考し、本賞と同日に発表。
- ・参加はクラス単位。フランス語の授業を二か月間使う。教育省公認。
- ・費用はそのほとんどをFnacという書店が負担。
- ・各高校での選考結果をもって次に各地方の1位を決め、最終的に国内12校、海外のフランス語学校1校からの代表生徒各1名が集まり、13人で議論して最終的な一位を決める。
- ・選考の過程で「著者との対話」の機会を開く。
- ・参加生徒は毎年約1500～2000人程度。

高校生直木賞のこれまでの経緯

2 「高校生直木賞」全国大会まで

- ・「高校生ゴンクール賞」をモデルに、2010年に都内私立男子校の「総合の時間」を用いて、〈議論して1位を決める読書教育〉を実験的に開始。希望者。無学年。

〈手順〉 1 生徒におすすめの作品を挙げてもらう。

2 その作品のプレゼンをしてもらう。（ビブリオバトル）

3 選考対象とする作品を選ぶ。

（長いもの、手に入りづらいものなどは省くよう助言する）

4 数作品を選び、読んできてもらう。

5 生徒たちで選考し、1位を決める。

cf. 「天竜文学賞」2009年～

高校生直木賞のこれまでの経緯

- ・ 同時に、「高校生芥川賞」の創設を文藝春秋社に打診。
→結果的に「直木賞」での再提案を受ける。
- ・ 2011年、岩手県の県立高校文藝部に打診。直木賞候補作で実施。
- ・ 2012年、静岡県の県立高校の国語教諭から参加の申し込み。
校内の希望者で実施。
- ・ 2014年、全国の四つの高校で実施。
各校から2名の代表者が東京に集まり、第一回全国大会を実施。
以降はHPにて。 Koukouseinaoki.com

高校生直木賞の今後の展開

- 第五回（2018年5月6日開催予定）の全国大会へ向け、参加校募集中。
- 少しずつ拡大する見込み。このところは、大体20校、200人ほどの参加。

高校生直木賞の読書教育としての利点

- ・ 多読：限られた期間に、5、6冊の本を読むという経験。
- ・ 精読：のちの議論に耐える読みの精度の要求。
- ・ 議論：ディベートと違い、自身の主張に基づいて論を組み立てる。
同じ題材を読み込んでいるので相手の話が分かりやすい。
共通の土台。（ビブリオバトルとの違い）
攻撃されても、自分自身のことではないので傷つきにくい
感想文のレベル向上。
→ 4 技能すべてに亘るメリット。

高校生直木賞の読書教育としての利点

- ・ 読むものの幅が広がる一教科書では扱えないような文章も。
- ・ 多少の背伸び。
- ・ 1位を決めるという真剣な議論。
- ・ 自分と異なる考えを知り、それを受け入れることで自分を広げる経験ができること。
- ・ 話し合う中で、物事の価値を決める共通の尺度を探る、という経験ができること。

参加者たちの反応とその後

第四回参加者の感想より

(詳しくはHPを <http://books.bunshun.jp/articles/-/3813>)

- 1 自分の気付かなかった作品の良さを他校の生徒に気付かされ、さらに作品の面白さを知ることができた
- 2 自分の読書に対する姿勢が少しだけ変わった／他の方々と話し合うことで作品の読み方が深まったような気がします。
- 3 議論を聞いて驚くしかありませんでした。同じ本を読んでいる、こんなにも視点が違うものなのかと。しかも同じ高校生なのに。
- 4 読み取ったことを他の人と共有し、どちらが正しいのか葛藤したり考えを深めることの楽しさを発見した。

参加者たちの反応とその後

- 5 初対面にもかかわらず、議論で自分の意見を恐れずに言うことができました。会が終わったあとも部屋のいたるところで議論は続いていて、
- 6 たとえそれぞれが異なる基準で本を判断していたとしても、話し合いの中で意見を交わしていくことで、その基準はより多角的になり、深まっていくことになるだろう
- 7 本を読むのは、ただそれだけでも面白い。けれども、誰かと分かちあえばもっと面白い。
- 8 これらの企画（読書会・ビブリオバトル）にも増して「本」の本質に迫ることができるのが選考会の良さだと感じる。
- 9 分かり合えないことは決して絶望ではない。同じ結論にたどり着かずとも、熱意や願いは共有できる。／一つだけ、僕らが自分以外の誰かになれる場所、が熱意や願いは共有できる。それは物語の中だ。同じ本を読んだ人とは、一度そうやって同じ世界を生きていた仲間なのだ。

参加者たちの反応とその後

- 10具体的にどこが面白いのか、何が好きなのか。つまらないと思った部分でもそれはなぜなのか。そういった部分を考えてみるのも読書の楽しみだということを学びました。
- 11たくさんの意見の中で自分の意見を戦わせる経験はあまりなかったため、とても有意義な時間となった。
- 12普段、本の感想を共有など絶対にしない。面倒だし解釈が自分と同じであった人にほとんどあったことがない。
- 13去年の自分の感想を見返す。そこには「偏見」を捨てろとメッセージ。自分はこれを打破できていたかな。
- 14その中で現れる“価値観の違い”が面白いと感じた。

参加者たちの反応とその後

15他の人の意見を聞き、話し合いの中で、自分の意見が変わっていきなのが、この企画の本当の醍醐味だったのではないか

16繰り返し読んで自らの力で見つけ出した『気づき』の嬉しさ17兄は第1回高校生直木賞の参加者だった。／高校生になったら、

自分もこれらの本について語りたい

18母校の読書文化の充実を

19もう一度読みたいなあと思わされた。

20最終的に一冊を選ぶ決め手になったのは、「自分にとって読書とはどんなものか」ということでした。

21「どこが面白かった」の世界から抜け出し、その面白さをどう表現すれば他人に伝えることができるのかを考えなければならない

参加者たちの反応とその後

「大学生芥川賞」

- ・ O B, O G たちが自主的に集まり、skypeなどを用いながら実践。
- ・ 今年上半期の芥川賞候補作について議論し、本賞発表前に、『影裏』を選んだ。
- ・ H P <https://ameblo.jp/daigakuakutagawa/entry-12287073062.html>

問題点および今後の課題

- ・実施すること自体のデメリットは今のところ一切寄せられていない。
- ・文藝部や希望者の参加にとどまる。授業を使うのは難しい。
- ・運営面で、これ以上拡大すると、資金的にも人員的にも難しい。
次回から日本文藝家協会と協力？
- ・「直木賞」の名前を冠することについて。

最後に

以上は「高校生」向けであり「直木賞」の候補を使った一つの例にすぎない。

「同じものを読み込んで、1位を決める」という根幹さえ押さえておけば、さまざまな場面、レベルで応用できるものと考えられる。